

機関番号：34301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520626
研究課題名（和文） 石刻史料からみた宋元代華北地方における仏教の社会史の変遷に関する基礎研究
研究課題名（英文） Transition of social history of Buddhism in the Huabei region during the Song and Yuan Dynasties: Fundamental research with stone inscriptions as a basic historical material
研究代表者
桂華 淳祥（KEIKA ATSUYOSHI）
大谷大学・文学部・教授
研究者番号：40148359

研究成果の概要（和文）：仏教関係碑刻を詳細に検討するため定期的に研究会を行った。また現地調査を実施し、碑刻の実物を検証して研究会で問題となった事柄を補足するとともに新たな史料の入手に努めた。これらの活動の成果を纏めたものが、27 の碑刻の全文を正確に録文・読解し、そこに記される重要な語句に注を付した「金元代石刻史料集－華北地域仏教関係碑刻（一）」である。

研究成果の概要（英文）：We held regular meetings to study stele inscriptions about Buddhism. We also conducted field works to examine the originals of inscriptions, complement the issues discussed in the regular meetings, and obtain new historical materials. The outcomes from the works are summarized in “Stone Inscriptions from the Jin and Yuan Dynasties: Stele Inscriptions about Buddhism from Huabei (1)”, where the entire text of 27 inscriptions are correctly recorded and made easily readable, and important words and phrases therein are annotated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：中国近世仏教史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東洋史 仏教史 石刻史料 金元代 中国華北

1. 研究開始当初の背景

従来、国内外における中国仏教史の研究には、主として仏教典籍をはじめとする「編纂史料」が利用され、かつその記述に従うものであった。もちろん「編纂史料」に対置される「生の史料」たる石刻史料に関しても、中国では清朝時代から各地に残る碑文を収集

編纂する過程において幾多の考証学者によってその有用性が指摘され、20 世紀前半には陳垣によって当該時代の道教関係石刻史料を集大成した『道家金石略』が編纂されているが、仏教に関するそのようなものは未だ見ない。また我が国でも 20 世紀前半に常盤大定・道端良秀両氏による現地仏教史跡の調査

及び碑刻拓本の将来があつてより、それらに対する検討もなされてきたが、その成果が従来の「編纂史料」による仏教史の認識を再検討するのに生かされてきたとは言い難い。これは、従来、中国の学界においては仏教が外来の宗教であるとの認識と仏教関係史料が難解であるということからその研究が敬遠され史料も紹介されてこなかったこと、また20世紀半ば以降の中国の社会体制や日中両国間の不自然な関係もあつて、双方における仏教関係石刻史料に関する研究自体が低迷していたことに起因すると思われる。しかし1980年代から始まった中国の改革開放政策とともに研究環境が改善され、個々にはあるが石刻史料が影印あるいは録文という形で出版されて入手が容易になり、さらに現地に赴き碑刻を直接検証できる機会を得ることも可能になるなど新しい局面が開かれたことで、近年、石刻史料を用いた研究が盛んに行われるようになった。

このような学界動向の中、研究代表者は、1980年代から仏教関係石刻史料に着目し、碑刻はその形態も歴史事象を考察する史料となり得るとの視点から、碑刻に見える文字以外の刻跡の意味を検討して、金朝治下の仏教教団が時の政治の動きに極めて敏感に反応していることを明らかにして（「金明昌元年建「西京普恩寺重修釈迦如来成道碑」について—金代仏教史の一側面—」『大谷学報』64巻4号）以来、石刻史料に見える様々な事象を帰納的に整理検討し、さらに近年の現地調査によって明らかになった知見によって、「編纂史料」からだけでは得られない社会の底辺の動向を跡付けた。そして当該時代の仏教史研究における新たな視点、すなわち、宋・金代の地域社会において寺院住持の異動などによって寺院間に密接な連繋のあつたことを提唱し（「宋金代山西の寺院」『大谷大

学研究年報』第52集）、その連繋が元代においても存続し、連繋する地域を拡大させている傾向があることを提示した（「山西からみた元代の仏教—寺院の連繋と法会と—」『大谷大学史学論究』第9号、「元初の法会について—石刻史料を手がかりに—」『大谷学報』84巻3・4合併号）。これらの研究の過程および本研究に先行する研究活動によって得られた石刻史料をまとめたものが「金元代石刻史料—靈巖寺碑刻—」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』23）である。またその後、元代に設置された華北仏教界を統率する最高位の僧官が、これらの連繋の維持拡大と不可分の関係にあることにも言及した（「石刻史料よりみた元代華北の仏教統領機構について—諸路釈教都総統を中心に—」『平成16～18年度科学研究費補助金「13、14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究—元朝史料学の構築のために—」研究報告書』）。

こうして浮かび上がってきた地域社会における連繋の存在は、社会全体にわたる仏教活動の実態を把握するために見逃せない事象であり、極めて重要な意味を持つと考えられる。本研究企画の背景にはこのような従来の研究状況がある。

2. 研究の目的

上記のような従来の研究状況を踏まえ、時代と地域を宋・元代の華北地方に設定して、そこにおける仏教と社会との関わりの歴史の変遷について、中国史の視点に加え、当時華北を領有していた遼・金・元といった異民族の支配体制や、朝鮮半島および日本との交渉など周辺の諸民族あるいは地域との関係という視点から、石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行って当該研究の基礎データを充実させ、それによって、従来の研究では史料が乏しいことからいまだ十分な歴史事象が把握されず空白の時代として扱

われてきた当該時期華北仏教界の実態を究明し、その動向を詳細に跡付ける。

また、従来の「編纂史料」に拠る仏教史に対する認識を新たにするとともに、そこに現れる事象が「仏教のネットワーク」として中国に限らず東アジア世界全体に及ぶものであることを提唱し、当該研究の更なる展開を導こうとする。

さらに、本研究は仏教の活動を解明しようとするものであるが、それは当然の事ながら当該時代の政治・経済・社会の動きなどとも密接に関わっており、ここで得られる成果によって、それらの動向をも浮かび上がらせることを目指す。

3. 研究の方法

本研究の目的達成のためには、何を置いても基礎史料たる関係石刻史料の蒐集と整理・分析を欠かすことができない。そこでまず仏教関係石刻史料集の作成に努める。具体的には、それを蒐集するため、従来十分には行われていない基礎作業、すなわち 既存及び最近刊行された石刻史料集（基本的には『宋代石刻文献全編』『遼金元石刻文献全編』『石刻史料新編』1・2・3 輯を使用）および最近個々に刊行されている石刻関係書籍など各種文献を網羅的に検索して仏教関係史料を抽出し、整理・分類して華北地方すなわち河北・河南・山西・山東各地域の仏教関係石刻史料の全体像を把握する。当然のことながら国内外の図書館・研究機関に収蔵される石刻史料をも視野に入れる。

また中国への現地調査を行って華北各地に現存する仏教関係石刻史料を徹底的に洗い出す。その際には、新出史料の紹介のみにとらわれることなく、旧知の史料についても現況での史料価値の位置づけを行う。本研究に先行する研究活動の現地調査において、現存する碑刻のなかには昨今の経済開発の波

のなかで破壊され失われていくものが少なくないという現実を目撃し、早急な調査の必要性を痛感したこと、既存の調査報告では仏教関係については不十分であることが判明したからである。なお現地調査については、現存する碑刻の多くが当該国の文化財であることから、それを所有する機関の了解と協力が必要であるが、その点については、海外研究協力者として中国仏教協会国際部日本科長・中国仏学院講師である李賀敏氏の協力を得ることになっている。

さらに、定期的に研究会を行い、こうして得られた史料について、研究代表者を中心に研究分担者・連携研究者・研究協力者それぞれの研究蓄積を駆使して精査分析し、道教関係の石刻史料集『道家金石略』に対応する仏教関係石刻史料集の作成を目指す。また同時に、当該地域の仏教界の動向について、研究代表者桂華は漢地仏教内部に培われた連携、研究分担者浅見は朝鮮半島の仏教との関係、連携研究者松川はモンゴル仏教との関係、同じく連携研究者松浦は唐・五代の仏教との関係、研究協力者藤原は遼代の仏教との関係、同井黒は一般社会の動向と仏教の関係、同清水は江南の仏教との関係、同加藤は禅宗の法統や規範の問題、同福島は寺院住持の選任に関する問題、というそれぞれの観点から跡付をし、華北全体を包括する「仏教のネットワーク」の存在をより鮮明にする。

4. 研究成果

まず、各種文献を網羅的に検索して仏教関係史料を抽出し整理・分類することについては、相当数の史料を抽出し、当該地域における仏教関係石刻史料の全体像を把握できた。それを手がかりにして行ったのが現地調査であり、そこでは次のような成果が得られた。

初年度に行った中国河南省の少林寺における調査では、本研究の準備段階にて『北京

図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』などの既存の史料集に掲載される拓影や京都大学人文科学研究所蔵の拓本を基本史料として検討していた金代の「少林禅寺西堂老師和尚塔銘」正隆2年(1157)、「前住持嵩山少林寺端禅师塔銘」大定8年(1168)、元代の「少林寺乳峰仁公禅师塔誌銘」至元5年(1268)、「普恵大師道公庵主塔銘」大徳3年(1299)、「宣授少林住持達公禅师塔銘」大徳11年(1307)、「宣授少林提舉興福普照藏雲大師山公庵主塔銘」至大元年(1308)、「大元贈大司空開府儀同三司追封晋国公少林開山光宗正法大禅师裕公之碑」延祐元年(1314)、「少林寺請疏碑」、「少林寺第十代妙巖弘法大禅师古巖就公和尚道行碑銘」「嵩山少林寺和公山主塔銘」〔以上3碑、延祐5年(1318)〕、「正宗弘法大師大名僧録少林功行之碑」至治2年(1322)、「顯教円通大禅师照公和尚塔銘」後至元5年(1339)、「少林寺第十五代住持息庵禅师行実之碑」至正元年(1341)、「少林寺第十一代住持鳳林珪公禅师行状之碑」至正9年(1349)、そして明代の「少林寺住持淳拙禅师才公塔銘」洪武25年(1392)などについて、その存否を含め現状を把握し、実見できた碑刻では、拓本や拓影では読みとれない文字を補うことができた。加えて既存の文献には載録されていない碑刻も確認できた。

次年度の中国河北省での調査では、柏林寺(趙県)の「慈懿和尚舍利之塔」天会12年(1134)、「特賜大元趙州古仏真際光祖国師之塔銘」至順元年(1330)、隆興寺(石家庄市)の「真定大隆興寺功德記」憲宗9年(1259)、「隆興寺重修大覚六師殿記」大徳5年(1301)、「皇元真定府隆興寺重修大悲閣碑」後至元元年(1335)、「隆興寺通照大師碑」至正6年(1346)など、金・元時代のものについては、従来の録文の欠を補うなど本研究に有用な史料が得られた。また隆興寺の「恒州刺史鄂

公国勸造龍藏寺碑」隋・開皇6年(589)、「重修鑄鎮州隆興寺大悲像並閣碑銘序」宋・端拱2年(989)、開元寺の「開元寺三門楼石柱」唐・大暦12年(777)など、隋・唐・宋代の碑刻も確認され、各寺院の歴史の連続性を窺い知ることができた。

最終年度の中国山西省交城県における調査では、従来全く知られず10年前にはじめて解光啓氏によって紹介された「円明禅院碑」(解光啓「金《太原交城県王山修建十方円明禅院記》与《第二代体公禅师塔銘并序》碑」『五台山研究』2000-2、「交城県王山円明寺金代碑文考釈」(『山西考古学会論文集』3山西古籍出版社 2000.11〔両者はほぼ同じ内容〕)を同氏の案内のもと実見し、克明に記録できた。この碑刻は、華北に行われていたとされる曹洞宗の流れで空白となっていた部分を相当量補うばかりでなく、当時の仏教界と統治者との関係を如実に示す史料として意義あるものであり、まさに当該研究領域に新たな息を吹き込む貴重な資料である。

このような活動の成果を纏めたものが「金元代石刻史料集—華北地域仏教関係碑刻(一)—」(『真宗総合研究所研究紀要』28)である。これは上記現地調査での成果を踏まえ、研究会で検討した27の碑刻の全文を録文・解釈し、そこに記される重要な語句に注を付したものであり、本研究の成果が集約されている。またそこに示した複数の碑刻を対比させて検討すると、地域を隔てても相互に関連性を持つことを窺わせる記事も散見される。こうした事象は、中国にとどまらず東アジア社会全体にわたる仏教活動を究明するために見逃せない極めて重要な意味を持つと考えられ、東アジア仏教史研究のさらなる展開を導く糸口となる。

なお、関係碑刻はこれだけにとどまらない。期間内に検討し尽くせなかった碑刻につい

ては、新たな機会を得て続編として公刊する
予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

桂華淳祥編「金元代石刻史料集—華北地域仏
教関係碑刻—」真宗総合研究所研究紀要、査
読無、28 巻、2011、15-119

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桂華 淳祥 (KEIKA ATSUYOSHI)

大谷大学・文学部・教授

研究者番号：40148359

(2) 研究分担者

浅見 直一郎 (ASAMI NAOICHIRO)

大谷大学・文学部・教授

研究者番号：10231903

(3) 連携研究者

松川 節 (MATSUKAWA TAKASHI)

大谷大学・文学部・教授

研究者番号：60321064

松浦 典弘 (MATSUURA NORIHIRO)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：80319813

(4) 研究協力者

藤原 崇人 (FUJIWARA TAKATO)

関西大学東西学術研究所・非常勤講師

井黒 忍 (IGURO SHINOBU)

早稲田大学高等研究所・助教

加藤 一寧 (KATO KAZUYASU)

花園大学・非常勤講師

清水智樹 (SHIMIZU TOMOKI)

元大谷大学・文学部・助教

福島 重 (FUKUSHIMA KASANE)

大谷大学・文学部・助教